

源氏物語の仏教―横川僧都の手紙の解釈について―

山中 理江

はじめに

宇治十帖が幕を閉じた後、浮舟は薫のもとに帰ったのであろうか。いや、決して戻らなかったであらう。

では自ら浮舟の出家を手がけた横川僧都は、彼女に薫のもとへ帰るよう勧めたのであろうか。浮舟の消息を聞きつけた薫に案内を頼まれた横川僧都は、浮舟宛の手紙を小君に渡す。

今朝、ここに、大將殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。御心ざし深かりける御中を背きたまひて、あやしき山がつの中に出家したまへること、かへりては、仏の責め添うべきことなるをなん、うけたまはり驚きはべる。いかがはせん。もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかきこえたまひて、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなん。ことごとには、みづからさぶらひて申しはべらむ。かつがつこの小君きこえたまひてん。(注1)

この手紙の解釈は学者の間で、浮舟を俗世に戻す「還俗勧告説」と、そのまま出家の道を歩ませる「還俗勧告否定説」との二つに真つ向から分かれている。「今朝、ここに、大將殿がお越しになって、あなたのご様子をお尋ねになりましたので、最初から一部始終を詳細に申しあげました。あなたをそれほど深くいとしんでおられた大將殿との御仲をおそむきになって、見苦しい山賤たちのなかで出家なさいましたことは、かえ

って仏のお叱りをお受けになるにちがひなからうと、大將殿からうかがって驚愕しております。」と、ここまでは問題ないであらう。その次の「いかがはせん」は、「どうしようか、どうにもならない」との意味が込められている。問題は次の一文で、多くの学者がこれまでどう解してきたのか、それぞれの意見を見てみよう。

「還俗否定説」

どうしようにも致し方ございません。あなたが本来もつていらつしやる前世からの約束に従つて、愛着や執念によつて人をくるしめる者の罪を取り除いてお上げになつて、一日でも仏弟子になり仏に帰依した功德はかりしれない深く大きなものですから、どのような事態になつても、出家の功德をしつかりたよりにしてくじける事なく行動なさいと申し上げます。「源氏物語の横川僧都と源信」阿部俊子氏より(注2)

・阿部俊子氏

「源氏物語にみられる出家に就いて―その二―」(注3)で阿部氏は、「もとの御契り」を「仏縁」と解している。還俗勧告説では、「薫と浮舟の契り」という意見に対し、大君の形代であり人形であり、さらには撫で物として薫に引き会わせ抱かれた浮舟に、薫との縁は考えられないというのである。阿部氏は、ここでの「契り」を、「運命ともいうべく、意志によつてゆがめることも、智慧によつて予測することも出来ないで、繋りあい、結ばれ、流されていく。この縦に横に関わり合いをもつ目に見えない宿命的なからみ合い、結びつきの約束」という。よつて、「御契りあやまち給はで」とは、「浮舟自体が前世から持つて生まれてきた―何かの物の怪によつてくるわけられる以前の―本来あるべき相、人間関係

の中でしめるべき本然の在り方をしつかりと誤ることなく見きわめて」という意味になる。「愛執の罪をはるかす」は、「本来契るべきものにすりかえた形代に執着し、かつもしそうであるとすれば、仏門に帰依したものに猶未だ愛着するという妄執をはらすように力をかけて上げるべきだ。何か、宿命的に物の怪につきまとわれやすい人だから、再び怨霊に魅入られ、取り殺されたりしないようにしつかりと仏を信じて行つてほしい」とのことである。つまり、尼のままで、薫の愛執の罪を除いてあげるということである。では、具体的にどのようにして除いてあげるのかというと、阿部氏は「祈り」「浮舟自身の行動の相」「話す」ことによつても「何でもいい」と述べている。浮舟にとつてはつらく困難なことであるが、「一日の出家の功德ははかりなきものなれば」信じて疑わず、仏縁にすがれば、必ず出家求道のあなたを仏はするのではないと力づけている愛情をこめた激励と見るべきであり、阿部氏はこの僧都の言葉に、安易な迷いをゆるす気持ちとは全く反対の、きびしい救済の手をさしのべる気持ちを読みとっている。「仏のすくいのかかしは自らの心の中に求めつづけて行く、末永い求道帰依の生活のなかにこそある、という自覚の中にある」と述べ、最期に阿部氏は、紫式部は自らの救いは自らの手で、厳しい心の修行の中でただ一筋に経をならい、仏の契りをたどつて行くところに、あるいは真の求道の極のさとりが得られるのではないかという考えを、僧都という助力者を配して、浮舟の求道の生活に期待しているという形をとつたのではないかという結論を出している。

・高木宗監氏

高木氏は『源氏物語の仏教』(注4)でおおよそ次のようなことを述べる。第一に、仏教での出家するための得度式に導師が唱えて受戒者に聞

かせる偈文に、「清信士度人經」というのがあるが、この意味は「この世界に流転して生きていく我々は父母その他の恩愛を断つては、生きてはいけない。しかしその恩愛を棄て、悟りの世界に入つて行くのである。これが父母その他の人々に、真実に恩に報いる者である。」というものである。これだけ悲壮な決意をして出家し、また出家させた導師の横川の僧都が、自分で出家させておきながら、たとえ薫からの要請があつたからと言って、オイ・ソレと還俗を許すわけがない。第二に、「契り」は夫婦の契りではなく、仏の弟子となるという約束、即ち「仏との約束」という意味で、俗世間という夫婦の約束というのではなく、受戒して仏の弟子となつて、尼として仏道修行をするという約束だ。第三に、「愛執の罪をはるかす」とは、夫婦としてやつていく以上、夫は妻に、妻は夫に愛着し執着していく。また夫婦の間に、もめ事や争いが起こつて、お互いが苦しむことにもなる。そこで夫婦の恩愛をさりと棄てて、悟りの道に入つて行くのが真実に妻の恩愛に報いる道である、という仏教思想の上から来ているもので、何も一旦出家させた者を再び還俗しもと通りの夫婦となつて、愛執に自分の頭を突っ込んで、じたばたする必要はないのである。

阿部氏も高木氏も「契り」を仏縁や仏との関係としていることに注目したい。また、どうしてせつかく出家したものをわざわざ俗世に戻すのか、このまま仏に「頼み」なさい、ということである。自らの手で厳しい修行の中で救いを求めると言う僧都の激励の言葉である。ただ、阿部氏は、「愛執の罪をはるかす」方法を、「祈り」「浮舟自身の行動の相」「話す」ことによつても「何でもいい」と具体的に述べている。

「還俗勸告説」

薫との深い宿縁に従って彼のもとに帰り、彼の愛執の罪をほらし、「一日の出家の功德」は無量であるから、救済の希望を持つように『源氏物語の精神的基樞』小野村洋子氏より（注5）

・岩瀬法雲氏

岩瀬氏は、『源氏物語の仏教思想』（注6）の中で、「御中を背き給ひて」と「御契あやまち給はで」、「出家し給へること」と「愛執の罪をはるかきこえ給ひて」、「仏の責め添ふべきことなる」と「一日の出家の功德は、はかりなきもの」をそれぞれ対応する形として捉えている。「御中を背き給ひて」と「御契あやまち給はで」は、説明を要していなく、「出家し給へること」と「愛執の罪をはるかきこえ給ひて」は出家と還俗であると述べている。「愛執の罪」は、遂げざる執心が罪であるから、薫の胸のややもやを一掃させてやるという。「仏の責め添ふべきことなる」が、執心ある夫があればかえって仏の咎めを受けるといふのである。「一日の出家の功德は、はかりなきもの」では、今還俗しても、今までの功德は広大で、河海抄に心地観経をひいて、一日一夜の出家にこれほどの功德が約束されるなら、この上何を望むことがあるう。だから、それを信じ還俗せよと勧める。（注7）だから「なほ頼ませ給へ」というのである。さらに、御法巻に、「一日一夜にても、忌む事のしるしこそは、空しからずは侍るなれ」という文があり、河海抄は、これを観無量壽経からひいて、たった一日一夜の持戒で救われることは明らか。（注8）「いかがはせむ」を「今まで強く思い続けていたことがあるが、今はこれまでとあきらめて」という意味でとっている。

つて、不如意に当面したとき、「あはれ」の情の発する地盤と、「宿世」の自覚の生じる地盤とが、親近なものである。憂悲苦惱の「あはれ」から自らの運命を反省すると言うことは、内面化に向かい、「宿世」であると了解する知的反省に達する。また、「宿世」における反省から、しみじみと自己の身を思い入ることに「あはれ」の生じる場面があるといえよう。つまり、「あはれ」と感じることに「宿世」を自覚する場面が生じるし、「宿世」を感じるとき「あはれ」の情が発動する。一方の深化、内面化は、他方の深化、内面化となり、両者は関連し相応しつつ展開する。それらは、等根源的なものであり、その根源は人間の基本的な在り方にそなわる欠如無常にもとづけられるという。では、これを理解した上で、薫の悟った方便の教理を考えてみよう。

人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ

道心を起こさせようとして仏のなされる方便は慈悲をお隠しになって、このように苦しみをお与えになるのだらうという、薫の宿世の了解。「宿世」が仏の方便としての救済施設であると了解されながら、その「宿世」の具体的にはたらく場面としての自然的な「あはれ」の世界は救済を障えるものとうけとられる。つまり、救済の施設が救済を障えるものであるという撞着に陥る。「あはれ」は執であり、仏教上の罪である。救済されるには、「あはれ」が必要である一方、「あはれ」を捨てなければならぬのだ。薫は、宿世を了解したものの、この撞着のため実践するすべが見いだせず、停滞の道をたどっている。

その撞着の究極的解決は、「宿世」のままに生きること、それは同時に

・小野村洋子氏

小野村氏は、『源氏物語の精神的基樞』の中で、「契り」を薫との契りと解している。もし、僧都と自分の契りなら、薫にも匂宮にも過去の宿縁はあり、「もとつ人」の用例により、薫の方が語感的にふさわしい。一生出家修道をするならば、その功德ははかりがたいとすすめているであろうが、しかしまた命終のぎりぎりの時に、やつとそこにたどりついたような人にも、また一生戒を受持しきることのできない弱い人間にも、なお希望はあると読むことは可能。やはり、岩瀬氏同様、御法巻の例をあげている。「もとの御契あやまち給はで」ということの意味は、「『宿世』のとおりに生きること、即ち自然的な『あはれ』の世界をそのとおりに生きることによって、仏の救済のはたらく場面に生きるといふ道に相応して、一歩すすむことになる」と考へるのである。」と述べる。ここで、小野村氏のいう「宿世」と「あはれ」の関係を少し説明したい。

小野村洋子氏は、「あはれ」と「宿世」の関係を次のように解釈している。「あはれ」は、「人間の心の深みにある、人間たることの基本的な特質にふれた感情乃至心情」、「悲哀」とか「憐愍」とか「愛情」というような感情から、悲しみとかあわれみとか愛というような感情の色調乃至性質を除去した心の状態、心の素地の有り様、構造」とし、「宿世」は、「当面する憂悲苦惱を、過去（宿世）における宗教的・道徳的な罪（罪障罪業）にもとづけ、現在の宗教的・道徳的な罪の自覚を、後世に報いられる罪業としてその果を予測して、現在わが身の上を省みおそれる」ことである。心にならず、不如意に当面すると、深い「あはれ」の情が生じる。「あはれ」の感情が内面的に深化してゆくときに、知的反省的な契機がはたらいて、より深い内面性になう。一方、不如意に当面し、その原因を突きとめようとすると、「宿世」の自覚と反省があらわれる。よ

自然的な「あはれ」の世界に生きることであるが、そのような行き様に在りつつ、そこに何らかの救済の機制をみいだすことによって、「宿世」においてある、同時に自然的な「あはれ」においてある世界を展開するということである。

ここで、先ほど述べた「もとの御契あやまち給はで」の意味を、「平常自然の境涯にいて、当座の念々に懺悔し転回するという宗教的世界に、仏の導きのはからいをうけることになる」と考えておられる。自然的な「あはれ」は「愛執の罪」であるが、念々転回の手がかりでもあるのだ。これが、「契り」を「薫との縁」と解し、還俗勸告説にとった理由である。さらに、小野村氏は、「この生の現実において、仏のはからいをうけ、念々に転回し念念に懺悔しつつ生きると言うことは、自然的な『あはれ』の世界に直接的に生きるといふことは、全く層次の異なることである。」と述べる。「一日の出家の功德は、はかりなきものなれば、なほ頼ませ給へ」の「頼む」は、「何かを信仰の対象として、自分の受けとり手、すくいとり手として頼む」という意味である。もちろん頼まれるものは、阿弥陀仏だ。浮舟を薫のもとにかえらせ、自然的な「あはれ」の世界に生きさせ、救済の希望を、薫や浮舟の精進努力の側にでなく、「頼む」（信）の場面に移そうとしていると解釈するのが小野村氏の論である。

ここでの還俗勸告説をとった学者は、「契り」を「薫との縁」ととり、薫の愛執の罪を還俗してはらし、一日の出家の功德は無量だから阿弥陀を信じて生きよ、ということであったが、小野村氏はさらに浮舟を俗世に帰す意義と解決方法を見つけ、独自の見解を展開している。そこには「罪」を認めた上での、僧都の意図があった。

一、僧都の手紙の解釈

では、私なりの解釈を行おう。結論からいうと、還俗勧告説をとった。確かに還俗否定説の高木氏が述べるように、浮舟が出家を願ったとき、僧都は「まだいといく先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみにしかは思したたむ。かへりて罪あることなり。思いたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになん」と中途半端な道心なら返って罪を作ることになることを戒めた。そして、決心を固くさせ「流転三界中」を唱え、出家を許した。(注9) 浮舟を「人の隠しすゑたるにやあらん」とおもしろくなく思っている薫の許に浮舟を還俗させることは、浮舟の救済を困難なものにするであろう。浮舟が必死の思いで出家したことを横川僧都も十分理解しており、浮舟自身は還俗を望んでいない。仏縁をしっかりと見極め、一日の出家の功德を信じて仏道修行に没頭する中に、浮舟の救済はあるであろう。浮舟に還俗を勧めたとすると、僧都の言葉に矛盾が生じ、浮舟の救済は危うい。だが、必ずしも還俗否定とはとれない点もあり、私は僧都がこの矛盾もあえて認め、浮舟還俗に新たな意図を提示したと考えた。そして、それはそのまま作者紫式部が捉えた仏教観、救済観にもつながる。張龍妹氏の著書『源氏物語の救済』(注10) や式部の父為時が当時勧学会の一員だったことも考慮に入れて、源氏物語の終焉に迫っていく。

(一) 横川僧都の人格から

還俗否定説の阿部氏に対して、はたして人間臭く慈悲深い横川僧都に、自らの手で救いを求めるよう激励する厳しさを見出せるのか。必死の求道一徹にこそ、式部の考えていた救済があるとは考えにくい。もし、横

川僧都が、自らの必死の救いを求める求道生活を浮舟に託したとしたら、紫式部は横川僧都を「あはれ」の分かる僧都には描かなかっただろう。横川僧都は、慈悲深い人である。慈悲深いとは、「あはれ」を感じることが出来る人ではないか。あはれ山伏は、かかる目にぞ音は泣かるなるかし。これは浮舟に発した言葉で、僧都の「あはれ」を読みとれるだろう。また、手習巻で「横川に、なにがし僧都とかひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり」と紹介される僧都は、「尊き人」とあるように、立派な僧であるようだ。この僧は、横川にいた天台宗の僧で浄土思想を抱えていることから源信をモデルにしたのではないかとと言われる。阿部氏は、『源氏物語の横川僧都と源信』で源信を専ら「敬虔誠実で心優しい人」で「正直真摯卒直」、「天台の教行に専念」した人と評している。

まず、僧都は修行中の山を三度下りている。一度目は初瀬詣の道中で母尼君の病氣になった時、二度目は浮舟に憑いている魔物を払ってくれとの妹尼の頼みによって、三度目は一品の宮の物の怪退治である。どれも人の命に関わるものだ。一度目は初瀬参詣の道中、病氣になった母を助けるため山から下りてきた僧都だが、源信にも母に逢うため山を下り、危篤の母の許で臨終念仏を説いたという話があるようだ。このように、恩愛を断ち切れていないのは、仏教では執にあたり、罪である。『源氏物語の仏教』の中で丸山キヨ子氏は、「山籠りを決意した僧都が、肉親の者の病のために山を降りるということは、修行の挫折であり、敗北である」と述べるが(注11)、それでも僧都や源信は母のために山を下りるのに自分を省みない。僧都は自ら「我無慚の法師にて、忌むことの中に、破る戒は多からめど」と弟子達に言うことから、自分の判断でよしとすることは深く戒も破っているのだろう。自分の信念を持ち、貴賤に関係

なく、他人に対しては遍く慈悲深い。命というものに、平等で絶対的な価値を置いている。母、正体の分からぬ女から皇室の姫君まで、貴賤をかえりみない点は源信にも通じるであろう。源信の歌に「まず西方極楽に往生できたら、還相回向して一切の者を悉く来迎引接しよう」というものがあるが(注12)、救済者として他人に対しての「慈悲」は「あはれ」を見られはしないか。

横川僧都に見られる「あはれ」に、小野村氏は「哀」の字をあてた、「世界苦のごときあはれ」と解している。本居宣長は『柴文要領』の中で、法師は「もののあはれ」を知らないで、実は「もののあはれ」深く知っているのだと述べている(注13)。法師は、物の哀をしらぬというその意味は、人を仏の道に導くには「物の哀をしりては救ひかたし、ずいふん哀しらぬものになりて、心つよくすゑめされは、済度はならぬ也」「されとそれはもと佛の深く物の哀をしれる御心より、此世の恩愛につなかれて、生死をはなるゝ事あたはざるを、哀とおほすよりの事なれば、しはらく此世の物の哀はしらぬものになりても、實は深く物の哀をしる也、儒道も心はへは同じ事也」という。

このように、平等な絶対的生命尊重やら生きとし生けるものに対しての慈悲、名譽や戒めにとらわれることのない自由などを僧都に見いだした。そこで、今僧都は、薫への愛執の罪からの救済と浮舟の救済を考慮しなければならぬ。「あはれ」を感じる僧都だからこそ、二人の気持ちを知り、浮舟を「あはれ」の中へ戻したのだ。加えて、僧都は法師ですら煩惱は捨てきれない、まして女の御身ではなおさら罪を作りかねないと感じ、出家の身として浮舟に「あはれ」が生じ、罪を作ることになつてしまふことを懸念した。尼の身で罪を犯すなら、還俗してしまつた方がよからうと判断したのではないか。

(二) 「愛執の罪」について

「愛執の罪」とは、いうまでもなく、薫の「あはれ」である。「あはれ」は、執であり、罪だ。これがあると、出家しても魂は救われない。六条御息所は、「愛執の罪」が深く、成仏できずに物の怪となって現れた。源氏は藤壺へ、柏木は女三の宮へと「愛執」が強く、密通の罪を犯すに至った。今、ここで薫の「愛執の罪」を浮舟に晴らせようとしている。つまり、「還俗して、薫のもとに戻って、魂を救ってあげなさい」と。阿部氏は、その仏道修行の中で何らかの方法によって薫の罪を「祈り」「浮舟自身の行動の相」「話す」ことで晴らすと述べているが、多少無理があるように思える。薫の罪がそんなことで晴らせるのなら、浮舟でなくても晴らせるのではないか。強い愛執によつて、六条御息所が源氏に、柏木が女三の宮に魂の結びを求めていたように、薫も浮舟を側において、魂結びをすることで初めて愛執は晴らされるのである。よつて、還俗否定説をとると、薫を見捨てるのかという疑問が湧いてくる。丸山キヨ子氏は、『源氏物語の仏教』で、「薫の往生の妨げになる罪よりは、還俗しそれを充たして共に救われることを真の救いとしている。自分だけが救われればよいというのではなく、時を待て」ということを述べる。

(三) 「一日の出家の功德：頼ませたまへ」の示すもの

還俗否定説は、出家のままでさらなる修行を続ければ、功德ははかりしれないものだというが、納得のいく論はない。たとえ一日の出家でさえ、大いに功德がある。だから、やはり今までどおり、仏の功德を頼みにして還俗しなさいという岩瀬氏、小野村氏の意見に賛成で、確かに御法巻に、「一日一夜にても、忌む事のしるしこそは、空しからずは侍るな

れ」という文がある。紫の上は亡くなっている、一日の出家でも功德があると考えられるだろう。「頼む」のは、やはり仏をあてにしているという意味であろう。一日の出家の功德は無量なら、どうしてあえて「頼む」という何かにする言葉が必要だろうか。今までとは違う何か不都合な状態になるからこそ、「頼む」という言葉が出てくるのだ。

(四) 紫式部の出家観——張龍妹氏の「身」と「心」の捉え方から——『源氏物語』に出てくる人々の出家のきっかけはそれぞれ違うが、「憂し」と思うことが出家の契機となるようだ。八の宮は、世の無常を悟るのも、自分の身に不幸が起こった時、世を恨めしく思うことがきっかけだという。出家とは、この世の無常を閑知し未練を残さず何もかも捨てて、仏門に入ることである。「この世の無常を閑知する」とは、何か自分の身に思うようにならなくて「憂し」と感じることもあり、その自己認識が世の無常をいたらしめるのである。不如意な「憂き身」を離脱し、「憂き世」から逃れようとの出家は、執心が残るため、魂の救済は得られない。無常を悟り、この世の絆をすべて断ち切つて出家した上で、魂は救われるのである。『源氏物語の救済』で張氏は出家を、世の中に執着するあまりの、情念の反転作用の所産と述べている。張氏が言うところによると、平安朝仮名文学での「身」は、単純に肉体を意味するのではなく、社会的要素が付加して、身分や地位という意味合いが強い。その社会的要素の増幅は、一方で「心」の非合理化をし、他方で感情的な「心」にも理性的な要素を強化するようだ。つまり、世の無常を閑知した、理性的な「心」によって「身」を捨てようとの行為は、同時に「身」に執着する情念の「心」の現れであるのだ。

紫式部は、夫宣孝の死により無常を悟った。そして、離脱の「心」を

持っていたが、幼子のことやら宮仕えやらの現世の「身」に執着してしまふ、もうひとつの情念の「心」と葛藤していた。

『紫式部集』に、「心」と「身」を詠んだ和歌がある。

身を思はずなりと嘆くことの、やうやうなのめに、ひたぶるのさまなるを思ひける

数ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり(注14)

張氏は「身を思はずなり」の「身」は、「憂き世を厭い、離脱を志向する『心』と背反する、現世に未練をおぼえ、執着する『身のありかた』と解すべきとして、この詞書を「この世に執着する」我が身のありかたを本意だと嘆く気持ちだが、次第に日常化し、さらに思い詰めた一途な状態になっていることを思い知らされていた」と解釈している。このように、式部は、この世に執着する「身」を嘆いている。歌の中で「心に身をばまかせぬ」思いをするのは、「自分の境遇や身分を思うようにさせることができないのではなく、境遇や身分に拘束される身を思うように解き放つことができない」と指摘している。そして、結局、「心」が「身」に従ってしまった、出家できないことを嘆いている。また、『紫式部集』に

心だにいかなる身にかかならむ思ひ知れども思ひ知られず

との歌がある。この歌を張氏は、「(身にしたがうほかないその)心でさえ、どのような身になら適応するのだろうか。どのような身にも適応す

ることはないと分かっているが、それも叶わず、(依然と我が身が嘆かれてしまふことだ)」と解している。たとえ、出家の身であったとしても、この「身」と「心」の葛藤は消えないのだろうか。このような内省を詠んだにもかかわらず、「わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をや思ひ捨つべき」というように、人並みでもないこの身をどうして思い捨てることができようかと現世執着を肯定した歌もある。このように、人並みである「身」とそれを厭う「心」、さらに「身」を思い捨てきれない「心」、この「心」の葛藤を式部は苦悩として感じていたようである。張氏は、「俗でしかありえない『身』、その上それに執着する『心』が存在するわけだから、出離の願望はもはや絶望的ではない」と述べられている。消息文の終わりには、

人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらむ。世のいとはしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠すべうもはべらず。ただひたみにそむきても、雲に乘らぬほどのたゆたふべきやうなむはべるべかなる。それにやすらひはべるなり。(注15)

とあるが、ここに式部の出家できない理由が書かれてある。心はこの世には何の執着も未練もないが、出家したとしてもこの世に生きている間は、懈怠の心が生じるかもしれないから出家しないと云っている。張氏は、「身」が存続するかぎり、出家は不可能で、たとえ出家したとしても「身」と「心」と「心」の葛藤があり、「身」への執着は救済を放棄せしめると解している。

このように考えると、紫式部にとって、出家とは絶望以外何でもなか

つたのではないか。「身」の減りぬ限り、この世に生を受けている限り、完璧な出家などありえない。薫は、八の宮を訪れた頃のひたむきな道心はどこにもなく、浮舟を失い、執着を断とうとするものの断念しきれなかった。蜻蛉巻に「人木石にあらざればみな情あり」と口ずさんで臥す場面があったが(注16)、私は薫の心境を、人は木石ではないので情はあつて当たり前、だから自分の執心も仕方ないんだと自分自身を正当化していると解した。さらに、八の宮は娘を案じることから、そのような情は人間である限り、自然に湧いてくるもので否定しても否定できない。「情」は「情念」であり、この源氏物語を覆っている「あはれ」であると取れるだろう。しかし、これがある限り真の悟りは得られないのである。ここに式部の「たゆたい」の精神が見られるだろう。式部にとって、情念とは「身」が減びてもなお残る。突きつめて考えると、救いは、身分ともいえる「身」を放棄し、「心」を無心にするのではなくるか。

張氏は救済について、「この世の無常を知覚した道心には背反する、人間の如何ともなしたい愛憐執着の問題である。その愛憐執着を抱えたままでは出家もできなければ、救済も不可能である」と述べている。ゆえに、死霊になっても光源氏との魂の共感を求めていた六条御息所。源氏の愛執を断ち切るため、冷泉帝の地位を確固とするため出家した藤原氏による救済よりも、むしろ女三の宮の「あはれ」を獲得することを自らの魂の救済とみていた柏木。源氏の憎しみや世間からの逃避のため出家し、朱雀院の庇護のもと最高貴族の保証された仏教生活を送った女三の宮。世の無常を悟ったものの、出家を願ひながらも叶わず、源氏の愛執を受ける「宿世の罪」ゆえ最期まで光源氏に「あはれ」を抱きつづけた紫の上。紫の上は、往生できたと考えたいが、出家しても死んだ身と

なっても、上品上生できる完璧な往生は不可能に近いのではないか。そして紫の上の死によりさらに「憂愁」を深めることになってしまい、物語の中で出家できなかった源氏。

源氏は紫の上など多くの絆を抱えてしまい、あはれを執としてとらえている。執がある限り救済はありえなく、憂きや無常ゆえの出家は逆に執着心を被るものである。張氏は、源氏が究極的に求めているのは心身一如の境地の出家であり、「憂し」を転化し悟りにし、情念としての魂の自己救済が終えた段階での出家であるという。この世の無常を感じ、現世を否定して浄土を求めようとする信仰心が生じ、その信仰心に叶う「身」のありかたとして必要とされるのが出家であったのだ。

紫式部は、仏教を批判していたわけではなく、彼女自身も出家の理想を持っていた。しかし、人間の情を否定するような厳しい阿闍梨のような修行は、式部にとつて、成し難いものであっただろう。薫に見られるような「停滞」の精神に陥ってしまい、「たゆたい」の心でいたのだ。

このように、式部はどうにもならない情念の処理に苦悩を抱いていたのだ。よって、出家したから救われるという考えは抱かず、出家をあまりあてにしていない。浮舟の仏道修行を通すことに対しても、それほど救済をあてにしていなと考えられる。むしろ、俗世に帰り、「あはれ」の情念の処理をした後、または処理しつつ救済されるような手段を提示したので。

二、僧都の最終的解決―罪を転じる―勸学会を中心に

以上、還俗勸告説をとった私の意見だが、最終的に僧都はどんな意図があつて、浮舟を還俗させようとしたのか。思っている薫の許に浮舟を選俗させることは、浮舟の救済を困難なものにするであろう。浮舟が必

死の思いで出家したことを横川僧都も十分理解しており、浮舟自身は還俗を望んでいない。浮舟に還俗を勧めたとすると、僧都の言葉に矛盾が生じ、浮舟の救済は危うい。だが、必ずしも還俗否定とはとれない点もあり、私は僧都がこの矛盾もあえて認め、浮舟還俗に新たな意図を提示したと考えた。さらに薫のもとに帰すことでのその矛盾を解決しなければならぬ。

私は、小野村氏の還俗して救済される方法に賛同する。小野村氏は、「宿世」が仏の方便としての救済施設であると了解しながら、その「宿世」の具体的にはたらく場面としての自然的な「あはれ」の世界は救済を障えるものと受け取った。つまり、救済の施設が救済を障えるものであるという撞着に陥ったという。僧都は浮舟を、この「宿世」のとおり、仏の救済のはたらく場面で生きさせようとする。小野村氏は、これを「平常自然の境涯にいて、当座の念々に懺悔し転回するという宗教的世界に、仏の導きのはからいを受ける」と考えておられる。「あはれ」の世界で生きるということ、執である罪の中で生きること。この「あはれ」の世界を宗教的世界に転じて、懺悔しつつ生きる。小野村氏は、自然的な「あはれ」の世界で憂悲苦悩を重ねること、救済の論理を了解しその中で生きることとは全く異なるという。さらに、一日の出家の功德を頼むということは、そこに阿弥陀仏の救済をあてにしてという、まさに「在家信仰」のようなものを思い浮かべさせる。

この「あはれ」＝「罪」を転じるという考え、それこそが僧都の最終的な解決であったのだ。「あはれ」を持つ人間には、「罪の転化」に、精一杯の救済があるのではないか。『源氏物語』の宗教意識の根柢で、斎藤氏は「大乘仏教の、煩惱即菩提の考え方から言えば、悪も不浄も肯定され排除されない」「凡聖不二、善悪相即、煩惱即菩提の立場に立つ密教に

において、不浄は本質的に清浄と一である。不浄や悪は、仏教に帰依し仏に摂取されるや、その属性のまま清浄や善に転化する。」(注17)というように、仏教では悪をそのまま善に転じることが行われる。

それは当時行われていた、文学の狂言綺語の誤りを法華経と結縁すること、「翻」＝「もてかえす」ということ―罪をそのまま善とする―勸学会の論理と一致する。勸学会とは、『三宝絵 比叡坂本勸学会』によると、三月・九月の各十五日に、比叡山の僧侶と大学寮の学生各二十名が西坂本の一室に集まり、現当二世の友として法の道・文の道を互いに相勧め合う意図をもって創始されたという。朝には法華経を講じ、夕には弥陀を念じ、曉に至るまで讀仏の詩を賦し、その合間に偈や詩文を朗詠・詠吟して夜を明かした。当時の信仰と文学の結合の典型である。白居易『香山寺白氏洛中集記』の「願ハコノ生ノ世俗文字ノ業、狂言綺語ノアヤマリヲモテカヘシテ、当来世 讀仏乗ノ因、転法輪ノ縁トセム」(注18)という「願ひの偈」を皆で誦す行為には、勸学会結衆たちが、自らの文学行為を「狂言綺語」(注19)と規定しながらも、文道・仏道の矛盾を克服したのである。

大まかに言うと、勸学会は詩を作る「文学サロン」と仏道を行う「念仏結社」という二つの面を持つているが、詩や文学とは、「狂言綺語」の罪を犯している。「綺語」は十悪の一つであり、「狂言」も「妄語」と解釈できる。そうすると、仏道に反することになる。そこで媒介とされたのが白居易の「罪を転ずる」という考えである。仏法の讀仏歌とすることとで、「狂言綺語」の罪を転じて自らの詩作行為を仏道において正当化してしまふというものである。いわば、柳井滋氏が「勸学会における釈教詩」において、「結縁」という考えを述べているが、「結縁」とは「すべ

種になるという、極めて漠然とした、些細な信仰行為の正当化にまで援用された」考えである(注20)。勸学会もその考えの一つであろう。狂言綺語の詩を、仏と結縁することにより、それが救いとなるというものである。

そう考えると物語は当然虚言を描く文学であり、仏教では罪にあたる。式部もそのことは十分承知であつただろう。「藤原道長と法華経」において阿部氏は、『法華経』の教旨や比喩や説法の構成等を十分理解した上で、當時の貴族の華やかな生活の中にくりひろげられるおぞましくまたあわれな人間の実相を諦観し、そこから『救い』をもとめつつなまめかしく語りつづけた紫式部の、『源氏物語』にみせている一乗の教えの理會と、才能をみのがすことはできないであろう(注21)。)と云うように、『源氏物語』という虚構の中で、法華経を組み入れていたのは、文学の「狂言綺語」において仏を信仰していたとも考えられる。『源氏物語』と仏教の中で高木氏は、「何といつても式部の信仰基盤となり、中核となつた信仰經典は、『法華経』であり、その補助的・助行的存在として『往生要集』があつたと言つても、過言ではないであろう。」と述べている。このように、物語中では、法華経が基盤となつていようだ。例えば、『三周説法』(注22)が応用されてあつたり、「方便品」や「寿量品」が多く見られる。

このように紫式部は勸学会の影響を受けていたと考えられる。横川僧都が最後に示したことは、「あはれ」の中に生きることと、それは罪だが、その罪を阿弥陀仏信仰によつて、もてかえす、つまり罪を転じつつ生きよとの教えであろう。最後に、式部の父為時が勸学会の一員だったことを加えておく。

おわりに

以上、私が還俗勧告説をとった理由を述べ、僧都の真の意図を探ってみた。最後に、「もとの御契り」の解釈が残ったが、還俗勧告説の者は必然的に「薫と浮舟の仲」と解する。還俗否定説をとる学者は、「浮舟の仏縁」と解していた。阿部氏は、浮舟は薫の人形であり、「契り」というには適さないと考えられたが、人形だから適していないというのは無理がある論だ。阿部氏は、「源氏物語に見られる出家に就いて―その二―」で「この手習、夢浮橋に見られる浮舟に関する『契り』はすべて彼の女を救いに導く因縁によって彼の女とかかわりをもつ人々との間に結ばれるものである。」と述べているが、「救いに導く因縁」とは、確かに「仏縁」である。だが、源氏物語の基盤になっているものに、法華経の方便品というものがあつた。方便とは、仏が真実に向かわせるために、わざと与える試練や苦悩である。今、浮舟も薫との縁―それはつらく苦悩なものであるが―それも真に仏に導くためにわざと与えられたものである。決して「薫との縁」が仏縁に通じていないわけではない。むしろ、この「薫との縁」こそが、浮舟を仏の道に導かせたものである。

注

- (1) 源氏物語本文の引用は、『源氏物語 新編日本古典文学全集』小学館を使用した。通釈も同テキストの脚注の大意を参考にした。
- (2) 阿部俊子「源氏物語の横川僧都と源信」H4, 10『平安文学論集』
- (3) 阿部俊子「源氏物語に見られる出家に就いて―その二―」S48, 2『国語国文学論集』
- (4) 高木宗監『源氏物語と仏教』H3桜楓社

- (5) 小野村洋子『源氏物語の精神的基底』S45創文社
- (6) 岩瀬法雲『源氏物語と仏教思想』S47笠間書院
- (7) 「大乘本生心地観経巻四 厭捨品第三」(大正大藏経第三卷本縁部上)に、「若善男子善女人。発阿耨多羅三藐三菩提心。一日一夜出家修道。二百萬劫不墮惡趣。常生善處受勝妙樂。遇善知識永不退転。得值諸仏受菩提記。坐金剛座成正覺道。」とある。
- (8) 「仏説観無量寿仏経」(大正大藏経 第十二卷 寶積部下 涅槃部全)に、「若一日一夜持八戒齋。若一日一夜持沙彌戒。若一日一夜持具足戒。威儀無欠。以此功德。廻向願求生極樂國。」とある。
- (9) 「諸経要集巻第四 入道部第四 出家縁第三」(大正大藏経第五十四卷 事彙部下 外教部全)または「法苑珠林巻第二十二 髮部第三」(大正大藏経 第五十三卷 事彙部上)に、「流転三界中 恩愛不能脱 棄恩入無為 真実報恩者 説此偈已脱去俗服」とある。
- (10) 張龍妹『源氏物語の救済』2000風間書房
- (11) 丸山キヨ子『源氏物語の仏教―その宗教性の考察と源泉となる教説についての探求』1985創文社
- (12) われだにもまづ極楽にむまれなば知るもしらぬもみな迎へてん(新古今集、釈教) 田中裕・赤瀬信吾 校注『新古今和歌集新日本古典文学大系』1992岩波書店より。
- (13) 大野晋 編『本居宣長全集第四巻』S44筑摩書房
- (14) 山本利達 校注『紫式部集 新潮日本古典集成』S55新潮社より。次の「心だに・・・」の歌も同じ。
- (15) 中野幸一 校注・訳『紫式部日記 新編日本古典文学全集』1

994小学館より。

- (16) これは、白氏文集・巻四 新樂府・李夫人「人ハ木石ニ非ズ、皆情有リ、如カズ、傾城ノ色ニ遇ハザランニハ」(八矢義高 校注『善本叢書 漢籍之部 第二巻 文選 志集 白氏文集』S55八木書店より)を引いている。
- (17) 斎藤暁子『源氏物語の宗教意識の根柢』1987桜楓社
- (18) 源為憲/馬淵和夫・小泉弘 校注『三宝絵 新日本古典文学大系』1997岩波書店より。
- (19) 道理に合ふことばと、誠実味のないことば。綺語は十惡の一つ。中村元『佛教語大辞典』S56東京書籍より。
- (20) 柳井滋「勸学会における釈教詩」S38, 12『共立女子大学短期大学紀要』
- (21) 阿部俊子「藤原道長と法華経」S61, 12『日本文芸論集』
- (22) 聴者の素質に応じて同じことを三度繰り返して説くこと。法と譬喩と因縁。(過去の物語) による。「佛教語大辞典」より。